



## 今治無尽の実態調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2019-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): Mutual loan association, 'Mujin' Group, Informal Finance 作成者: 永井, 真也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009820">http://hdl.handle.net/10258/00009820</a>

# 今治無尽の実態調査

永井 真也\*<sup>1</sup>

## A Field Study of the Present Condition of Imabari City's 'Mujin' Group

Shinya NAGAI

(原稿受付日 平成 30 年 7 月 2 日 論文受理日 平成 31 年 2 月 1 日)

### Abstract

The mutual loan association, the financial means for many ordinary people, was thought to have perished due to the development of the modern financial industry. In some regions, however, it still actually exists. In Imabari city in Ehime prefecture, mutual loan associations are still active and this has been confirmed by a survey. This was the first research-based survey of mutual loan associations to be carried out.

Further, though many believe it is an inefficient financial means when compared to the modern financial system, from an analysis of the survey results reasons for these mutual loan associations' continuance are outlined.

Keywords : Mutual loan association, 'Mujin' Group, Informal Finance

---

### 1 はじめに

日本に近代的な銀行が設立される以前の庶民のまとまった資金の調達手段として、無尽（講）や頼母子講（両方とも同じ意味<sup>1</sup>で用いられる。）と呼ばれる相互扶助の制度があった。貧困対策や急な資金需要へ対応するための民衆の集まりであった。地域の相互扶助として存在していた無尽であるが、無尽業法<sup>2</sup>の下で金融機関として発展した後、制度的に県単位で集約<sup>3</sup>され、現在の第二地方銀行の起源となっている。

民俗学者の佐治（1989）によると、「頼母子講・無尽に関する研究において中心的な役割を果たしてきたのは、いうまでもなく歴史学であり、その研究をさかのぼると明治三十三年（一九〇〇）、三浦周行による建治元年（一二七五）一二月の高野山領紀伊國猿川真国三箇庄庄官請文十条、（中略）の解説の発表」

---

\*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

が近代における無尽研究の嚆矢である。その後、三浦圭一（1959）の研究によって整理されたと紹介されている。

松崎（1993）による先行研究の分類において、「これらの歴史学の成果の後に、社会人類学・法社会学など、頼母子講を社会的集団のひとつとして、共時的に扱う立場からの研究が盛んに行われてきた」ことが示されており、「一九七二年に北島照明が法社会学の見地から、模合を①親睦模合と②金融模合に分け、アンケート調査を軸に契約慣行としての模合を分析した」ことを紹介している。北島（1972）が研究対象とした「模合」は沖縄の表現であり、無尽や頼母子講と同じ意味である。模合、無尽、頼母子講への社会科学的な分析は北島（1972）の研究が最初と考えられている。他にも大木（1978）の宮古島での模合の研究がある。

金融業として無尽が発展するプロセスは、麻島（1981）が詳しい。庶民金融として活発であった無尽・頼母子講が、無尽会社が近代的な銀行へと発展する中で、庶民が無尽に参加する魅力は薄れていった。経済学における歴史的な無尽の研究としてはナジタ（2009）がある。最近のファイナンス研究としては、松尾（2012）による多期間モデルによる無尽と銀行の比較研究、榊原（2014）によるマイクロファイナンスとしての研究がある。榊原（2014）には「効率的な銀行から融資を受けられない人が集まって無尽講を作り、相互扶助で融資を行っても、その融資の非効率性から長期的には消滅することになる」と、理論的に融資手段としての無尽は続かないと述べている。

本稿の目的は、北島（1972）と同様にアンケート手法を用いて、現代における人々のつながりの研究として愛媛県今治市で行われている無尽の実態を初めて明らかにすること<sup>4</sup>である。具体的には、第1に、制度的に残っていないはずの無尽が今治で存在していることをデータから確認する。無尽の一例として、今治無尽の存在を報告する。第2に、ファイナンス理論では残っていないはずの無尽が、金融手段または親睦手段として残っている理由をアンケート調査から明らかにする。

## 2 無尽の概要（今治の概要）

無尽や頼母子講は救済制度として、急な事情でお金に困窮している者を親にして、1回目に集まった資金すべてを親に与えていた。2回目からは参加者のうちの誰かが全額持ち帰り、全員に一巡するまで行われた。徐々に救済目的から、利息を取る営利目的、飲食を伴う親睦目的、旅行等の積立目的等、多様な形態の無尽が現れた。松崎（1993）は、発会の目的を経済救済、相互扶助、親睦の3つに分けている。

佐治（1989）の期間による分類では、組織が長期にわたり継続されるものと、1回り1年で解散する短期のものがある。一般的な無尽は、集まった人が資金のやり取りと食事をする。親睦目的の無尽では、「食い無尽」「お茶無尽」がある。食い無尽は、今治では飲み無尽と呼ばれ、資金のやり取りをせずに親睦を目的に月に1回行う集まりである。お茶無尽は、今治ではランチ無尽ともいわれ、夜に行われる食い無尽より手軽に、女性がランチやお茶を共にする無尽である。喫茶店のモーニングで行う場合もある。積立を目的とした無尽では、持ち寄った資金を積立て、無尽の満会時に構成員が一緒に行く旅行の資金にする。月1回の食事と年1回の旅行のための親睦目的の無尽である。

無尽の発会きっかけは、同業者、下請け関係者間、PTA、同窓会など、日頃のつき合いの延長である。今治での聞き取りでは、無尽は主に11人で構成するそうで、1万円ずつ持ち寄って11万円集める。落とした人は出したお金と受けとったお金の差し引きが10万円となってキリがいいからだそうだ。親と呼ばれる人が保証人となり、途中で払えない人が出て資金が回らない場合に、親が代わりに支払って満会まで続ける決まりがある。親がすべての責任を持つことで、無尽への信用補完が行われる。今治では、信用のある人が親になる。

現在の無尽についての市民の認識は、無尽は経営者がつき合いで行うもの、若者はしない、という声が多く、全体的に無尽を行なっている数は減ってきているように感じている。経営者にとっては、等しい仲間との月一回の集まりであることに加え、羽振りがいいように見せる見栄の部分もある。そして、無尽を一緒にやっているということが固い絆であるという証になる。

### 3 アンケート調査の方法

2015年12月に今治市内の事業所の代表者に対して無尽のアンケートを実施した。アンケートの方法は配布・郵送回収によるもので、今治商工会議所の「会報チラシ同封サービス」を利用した。12月分の商工会議所会報にアンケート用紙を同封して商工会議所の会員に3,050部を配布した。受取人払い郵便の封筒をアンケートと一緒に配り、2016年1月末締めで返信を依頼した。320部を回収し、回収率は10.49%であった。

アンケートの内容は、【質問1】から【質問4】までの属性についての質問と、【質問5】から【質問8】までの無尽についての質問で構成されている。

属性の質問は、【質問1】性別（男性 or 女性）、【質問2】年齢（①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代 ⑥70代以上）、【質問3】業種（1. 建設業 2. 製造業 3. 情報通信業 4. 運輸業 5. 卸売業 6. 小売業 7. 金融業・保険業 8. 不動産業・物品賃貸業 9. 学術研究・専門技術サービス 10. 宿泊・飲食業 11. サービス業 12. 教育・学習支援業 13. 医療・福祉 14. その他）、【質問4】従事者数（①1～4人 ②5～9人 ③10～29人 ④30～49人 ⑤50人以上）である。

無尽についての質問は、【質問5】無尽の経験の有無、さらに【質問5】で無尽に参加した経験が「ある」と解答した場合に、【質問6】無尽をする理由（複数選択可）（①これまでの人間関係（しがらみ）②情報収集 ③新しい出会い ④会社の資金繰り ⑤個人の資金繰り ⑥飲食を楽しむ ⑦会話を楽しむ ⑧その他）、【質問7】無尽の参加数（二つのタイプに分けて数字で回答。両方に回答可能。） A. お金の融通するタイプの無尽（本文中では金融型と表記） B. 飲み会、ランチなど親睦だけのタイプの無尽（本文中では親睦型と表記）をたずねた。

また、【質問5】で無尽に参加した経験が「ない」と回答した場合に、【質問8】無尽をしない理由（複数選択可）（①無尽を知らない ②仕組みがわからない ③参加したいが時間がない ④誘われたことがない ⑤お金がかかる ⑥個人的に嫌い ⑦面倒である ⑧世間のイメージがよくない ⑨人付き合いが苦手 ⑩その他）をたずねた。

回答者の手間にならないよう質問数を抑えて、無尽の経験がある人に対する質問数は7、ない人への質問数は6とした。

### 4 アンケート調査の結果

質問1から質問4までの属性についてのデータは表1に、質問5から質問8までの無尽に関する質問のデータは表2、図1-図3に示している。【質問1】の結果、アンケートの回答者の90%が男性であった。【質問2】の結果、回答者の年代は、20代、30代が少なく、40代、50代、70代がそれぞれ全体の2割程度、60代が最も多く3割に達していた。【質問3】の結果、業種別の事業所数では、小売業の63が最も多く、製造業55、建設業49、サービス業45、卸売業37の順であった。【質問4】では、従業者1-4人が142で最も多く、5-9人の67、10-29人の63の順であった。

表1 属性データ（回答数、割合%）

質問1 性別	男性		女性		無回答							
	288	90%	30	9.38%	2	0.62%						
質問2 年齢	20代		30代		40代		50代		60代		70代	
	2	0.62%	19	5.94%	69	21.57%	71	22.19%	98	30.63%	61	19.06%
質問3 業種	建設		製造		情報通信		運輸		卸売			
	49	15.31%	55	17.19%	3	0.94%	13	4.06%	37	11.56%		

	小売		金融保険		不動産		学術研究・専門 技術サービス		宿泊・飲食	
	63	19.69%	6	1.88%	9	2.81%	5	1.56%	19	5.94%
	サービス		教育・学習 支援		医療福祉		その他			
	45	14.06%	1	0.31%	8	2.50%	24	7.50%		
質問 4	1-4 人		5-9 人		10-29 人		30-49 人		50 人以上	
従業者数	142	44.38%	67	20.94%	63	19.69%	19	5.94%	28	8.75%

【質問 5】では、無尽の経験の有無を質問した。あると回答したのは 268 人（全回答者の 83.75%）、ないと回答したのは 52 人（同 16.25%）であった。無尽を経験している代表者の割合は 83.75%と非常に高い割合である。男性だけに限れば、無尽に参加している割合は 85.42%に少し上昇する。【質問 5】の無尽の経験への回答から、現在でも今治で無尽が行われていることは明らかである。

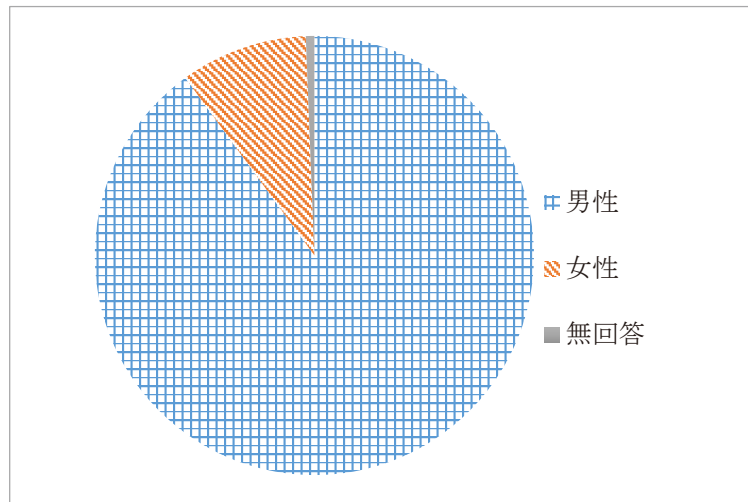


図 1 回答者の男女比 (質問 5)

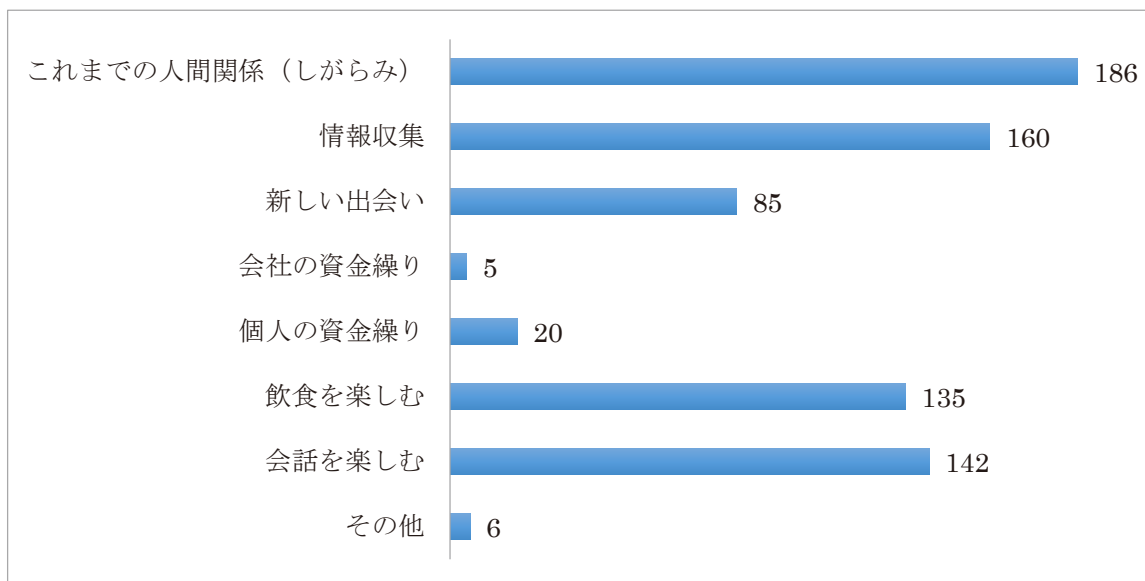


図 2 無尽に参加する理由 (質問 6)

【質問 6】の結果（図 2）では、参加する理由についての質問に対して、これまでの人間関係（しがらみ）という回答は 186（あると回答した人の 69.40%）、情報収集は 160（同 59.70%）、新しい出会いは 85（同 31.71%）と回答の上位を占めた。一方、会社の資金繰り（5 人）、個人の資金繰り（20 人）は比較的少なかったため、庶民金融としての役割は低下していることがわかった。

現在の無尽は、人々のつながりの手段、情報収集手段としての機能が重視されている。

【質問 7】の結果（表 2）では、無尽のタイプ別に参加の数をたずねた。金融型のみの人、親睦型のみの人、両方に参加している人の 3 種類ある。無尽に参加する頻度は、金融型は 2.35 回／月、親睦型は 2.67 回／月である。個人別に再集計すると 3.65 回／月となるので、1 週間に 1 回よりやや少ない頻度で無尽に参加している。（タイプ別の詳細はクロス集計の表 3 に記載してある。）

【質問 8】の結果（図 3）では、参加しない理由についてたずねた。誘われたことがないという回答は 21（ないと回答した人の 40.38%）が最も多かった。個人的に嫌いは 17（同 32.69%）、参加したいが時間がないは 14（同 26.69%）と上位を占めた。面倒である、お金がかかる、仕組みがわからない等の回答も多かった。

表 2 無尽のタイプ別の参加数（質問 7）

	金融型	親睦型	個人別合計
回数の総数	317	398	715
回数の記入者数	135	149	196
平均（回）	2.35	2.67	3.65
最高値	14	20	20

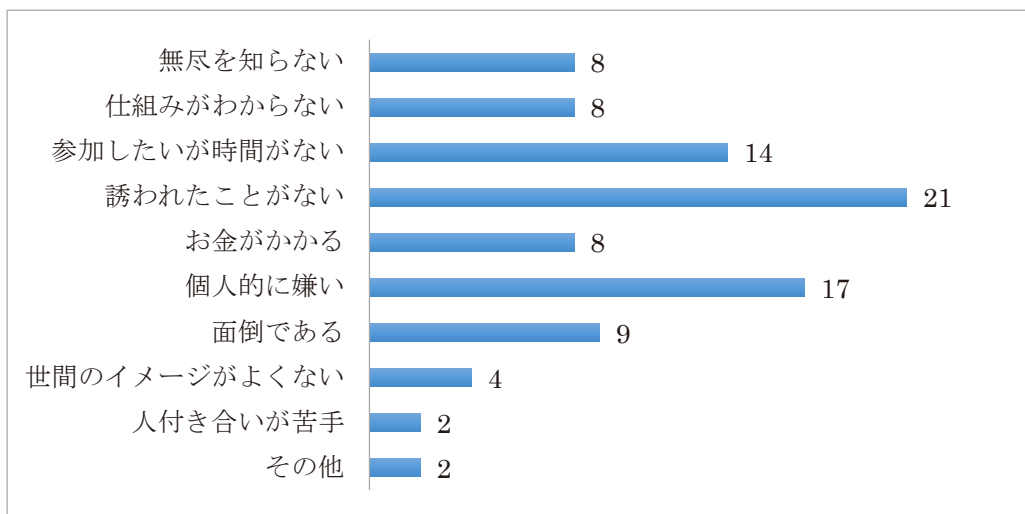


図 3 無尽に参加しない理由（質問 8）

## 5 クロス集計による考察

アンケート調査によって今治無尽の存在を確認できたわけである。ここでは、アンケート調査結果をクロス集計することによって無尽に参加している人の実態をより明らかにする。

### 5.1 性別による無尽への関わりの相違

無尽参加の有無と、金融型、親睦型で集計し、別に金融型のみ参加、親睦型のみ参加、両方に参加で分類した。女性のサンプル数が少ないが、女性経営者の無尽の参加の割合は、男性経営者より少し低か

った。全体では、親睦型 67.16%が金融型 60.07%に比べて 1 割程度（7.09%）多く、両方に参加するという回答も無尽を経験した人は 32.84%であった。

表 3 無尽類型別・男女全体別集計

	男性	割合%	女性	割合%	性別の 無回答	全体	割合%
無尽あり	246	85.42%	20	66.66%	2	268	83.75%
金融型	148	60.16%	11	55%	2	161	60.07%
親睦型	167	67.89%	10	50%	2	180	67.16%
金融型のみ参加	65	26.42%	8	40%	0	73	27.24%
親睦型のみ参加	85	34.55%	7	35%	0	92	34.33%
両方に参加	83	33.74%	3	15%	2	88	32.84%
無回答	13	5.28%	2	10%	0	15	5.6%
無尽なし	42	14.58%	10	33.33%	0	52	16.25%
合計	288	90%	30	9.38%	2	320	100%

## 5.2 年代別にみた無尽への関わり

年代別の回答者に対する無尽への参加者数は、表 4 の「無尽あり／年代別」では 20 代から 70 代以上まで年齢階層が上がるにつれて、無尽参加率が上がっている。特に 70 代以上の階層では、無尽に参加している人が 91.80%と 9 割を超える。古い年代ほど無尽に参加し、無尽を慣習として受け継いできている様子が見えてくる。

金融型のみに参加している割合は、50 代の 30.99%を最高に以後低下傾向であるが、両方に参加している割合は 60 代が 33.67%と高い。親睦型のみに参加している割合は 70 代以上が 52.46%と年代別の半数以上になっている。この特徴から、資金需要が 50 代あたりから高まり、60 代では飲食も含めたつきあいが増え、70 代以上になると資金繰りからは距離をおいて、つきあいを重視するように変化すると考えられる。

表 4 無尽類型別・年代別集計

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	合計
年代別回答数	2	19	69	71	98	61	320
金融型のみに参加	0	2	14	22	23	12	73
	0%	10.53%	20.29%	30.99%	23.47%	19.67%	22.81%
親睦型のみに参加	1	6	15	19	19	32	92
	50%	31.58%	21.74%	26.77%	23.47%	52.46%	28.75%
両方に参加	0	3	25	16	33	11	88
	0%	15.79%	36.23%	22.54%	33.67%	18.03%	27.50%
回答不明	0	1	3	2	8	1	15
無尽あり	1	12	57	59	83	56	268
無尽あり／年代別	50%	63.16%	82.61%	83.10%	84.69%	91.80%	83.75%

### 5.3 業種による無尽への関わりの相違

図4に、業種別の無尽の経験があると回答した割合をみた。卸売 93.94%、運輸 92.31%、サービス 91.11%、建設 89.8%、不動産・物品賃貸 88.89%が上位5業種であった。さらに表5で、無尽の参加の割合が高かった上位5業種の無尽に参加する理由をみた。参加の割合が高い業界は、参加する理由の「飲食を楽しむ」は全体と比べて19%低く、飲食を楽しむことは大きな目的ではなく、これまでの人間関係（しがらみ）、情報収集、会話といった人々のつながりを重視していた。

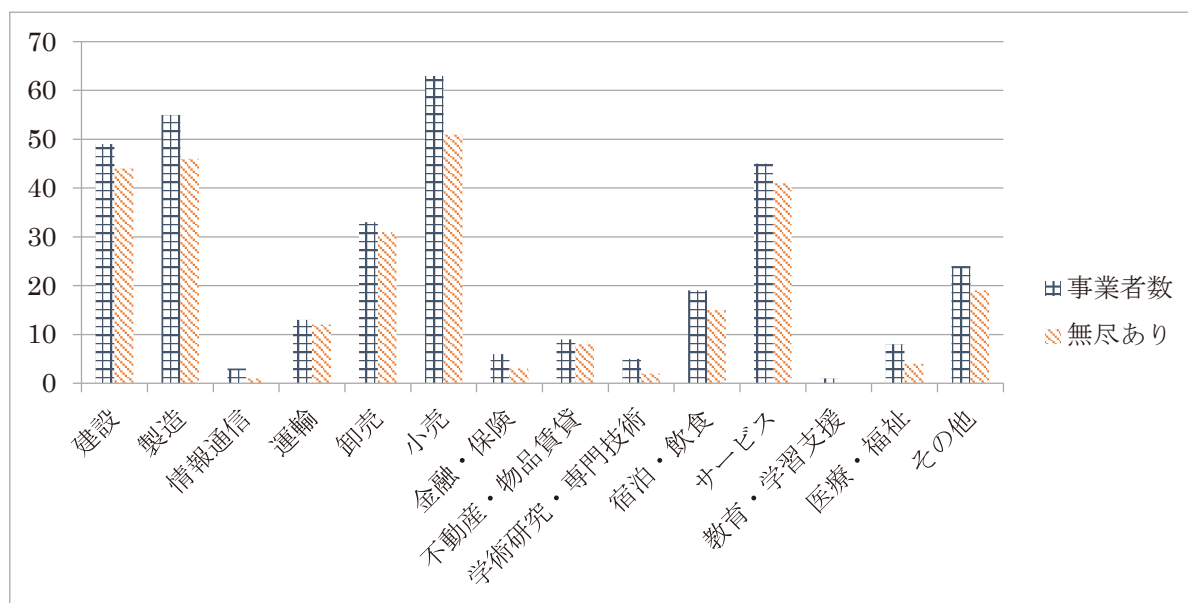


図4 業種別の無尽の参加状況

表5 無尽の参加の割合が高かった5業種との比較

	全体 (N=268)		5業種合計 (N=153)	
	人数	割合	人数	割合
これまでの人間関係（しがらみ）	186	69.4%	96	62.75%
情報収集	160	59.70%	87	56.86%
新しい出会い	85	31.71%	47	30.72%
会社の資金繰り	5	1.87%	2	1.31%
個人の資金繰り	20	7.46%	14	9.15%
飲食を楽しむ	135	50.37%	48	31.37%
会話を楽しむ	142	52.99%	75	49.02%
その他	6	2.24%	1	0.65%

### 5.4 代表者の年代、従事者数と無尽の関係

従事者数と無尽の関係をみるために従事者数別と年代別のクロス集計を行い、無尽への参加数と参加割合から分析した。ただし、サンプル数の少ない従事者30-49人の事業所（サンプル数19）と従事者50人以上の事業所（同28）については、合算して30人以上の事業所として集計した。



図5から、無尽の参加者数が多いのは、代表者が60代で従事者1-4人の事業所の45人（あると回答した人全員の16.79%）、ついで代表者が70代で従事者1-4人の事業所の26人（同9.7%）であった。代表者の年齢が高い従事者1-4人の事業所の無尽の参加が顕著であった。

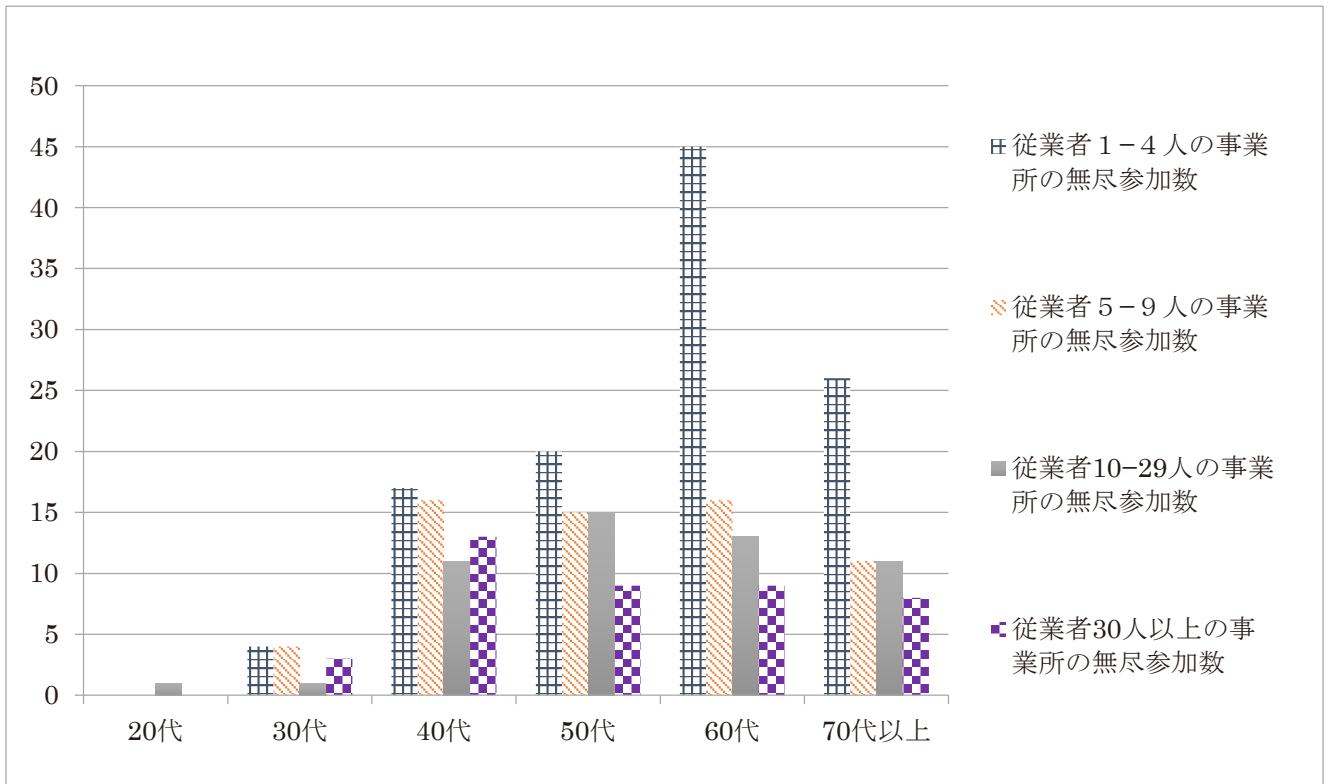


図5 従業者数別・年代別の無尽の参加数

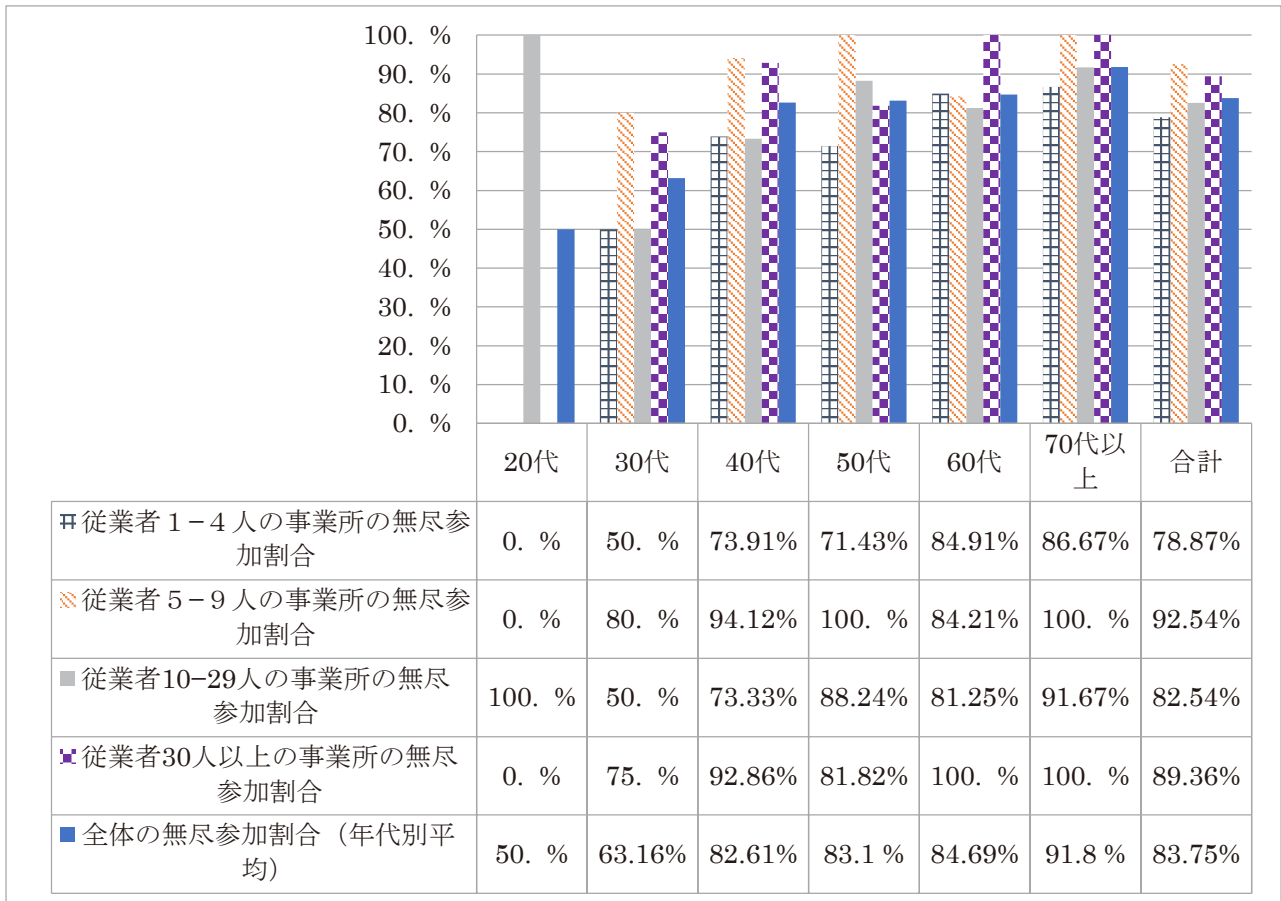


図6 従業者数別・年代別の無尽の参加割合

図6から、従事者1-4人の事業所では、規模別・年代別の無尽割合で60代だけが全体の年代別無尽割合をわずかに越えているが、それ以外の年代は全体を下回り、規模全体でも4.88%下回る結果となった。また、従事者5-9人の事業所は逆に60代だけが全体年代別無尽割合をわずかに下回っているが、それ以外の年代は上回り、全体でも8.79%上回った。従事者10-29人の事業所では、年代別に上下のブレがあるが、全体では全体年代別無尽割合を1.21%下回っただけであった。従事者30人以上の事業所では、全体で5.61%上回り、40代、60代、70代の参加率が高かった。

従業者数別では、従業者5-9人の事業所全体で92.54%と無尽の参加の割合が最も高く、続いて従業者30人以上の事業所全体の89.36%であった。

## 6 おわりに

今回の調査は、今治無尽に対する初めての調査である。アンケートのデータから、回答者全体の83.75%が無尽に参加した経験があり、特に回答者の9割を占めた男性では、無尽に参加している割合は85.42%であった。少なくとも、今治の経営者の間では無尽が行われていることが確認できた。愛媛新聞社今治支社長と地元FM局の代表者に、アンケートの結果について尋ねたところ、肌感覚で正しいというコメントをいただいた。

金融理論的には存在しないはずの無尽が存在している背景は、アンケートの無尽に参加する理由から、「これまでの人間関係(しがらみ)」(69.40%)、「情報収集」(59.70%)が高い割合であった。呉服屋の男性は、「先代も15個、私もかつては15個ぐらい無尽をしていて、無尽の仲間が娘さんの晴れ着を必ず買いに来てくれた。まさに運命共同体。」と答えた。金融型の無尽をしても「これまでの人

間関係（しがらみ）」と「情報収集」が目的に多いことについて、先の支社長は「見栄があるのでカネとは言わないでしょう」と教えてくれた。

さらにアンケートの結果から、今治での無尽の状況がわかった。金融型の無尽も親睦型の無尽も同じ程度行われており、クロス集計から年齢の高い年代ほど無尽が慣習化しており、特に70代以上の経営者は資金のやり取りをせずに親睦型で付き合いを続けている人が多かった。長年経営をして事業が安定している人は金融型をしないということと、病気をしたりして付き合いを控えていることが考えられる。

金融型と親睦型をあわせた全体の無尽参加数は月3.65回であったことから、今治の事業所の代表者ならば、週に1回程度の割合で無尽に参加している。今治の社交文化として続いていると考えられる。昔から今治では「石を投げたら社長に当たる」と言われるほど零細企業が多く、元々経営者の多い土地柄なので、今でも経営者の間で無尽が残っている原因の1つである。経営者以外の市民も無尽をしているが、金融型は一回2万円が相場で、勤め人の身では多く参加できないと聞いた。

今後の課題として、今回の経営者対象の調査では女性のサンプルが少なかったことから、次回は女性をターゲットにした無尽の調査を試みたい。また、産業クラスター研究として、産業別の無尽の状況を調査することも有益であると考えられる。調査を重ね社会全体の無尽の動向から、産業クラスター研究は地域のつながりとしてのソーシャルキャピタル研究へとつなげようとしている。

今回、地域のつながりを分析する糸口として無尽の調査ができたことは有意義であったが、今治無尽の先行研究がない中での調査であり、まだデータ化によって今治無尽の概要を調べたに過ぎない。次回以降のヒアリング調査でより深い部分を明らかにしたい。

---

<sup>1</sup> 宗像（福岡市）には、1800年代はじめ以降1830年代の天保飢饉までの間について明確な証拠資料が残っている。講は西日本では頼母子講、東日本では無尽講として広く知られていたが、宗像の相互扶助組織は「定礼」と呼ばれていた。これは「定期的に礼を支払う」という意味である。（ナジタ 2009、p.87）

<sup>2</sup> 明治の末、大正初期に、無尽が営業化したことによる無尽会社の設立が相次いだので、粗製乱造する無尽業に対する取締法として1915（大正4）年に無尽業法が成立し、政府の監督下での免許制になった。

<sup>3</sup> 「政府は戦時金融体制に組み込むため、昭和13年には無尽業法を改正して「一県一社主義」の強化策を押し進め、昭和17年5月からは金融統制団体令にもとづいた弱小無尽会社の整理を行った」（ひめぎん物語、p.13）ことから、今日のような都道府県に1つの第二地方銀行体制になった。今治の無尽もの愛媛無尽（現在の愛媛銀行）の中へと取り込まれたのである。

<sup>4</sup> 2015年の調査の際に、愛媛新聞社の今治支社の佐伯支社長に確認したところ、過去20年間の愛媛新聞のデータベースに無尽に関する記事はないと教えていただいた。今治の無尽に関する学術データベースの記述はなく、今回の調査が初めてとなる。参考文献にあげた2016年の愛媛新聞の無尽に関する記事は、今回の調査結果に基づいた記事である。

文献

- (1) Tetsuo Najita, ORDINARY ECONOMICS IN JAPAN, The University of California Press, 2009 (テツオ ナジタ, 五十嵐暁郎監訳, 福井昌子訳, 相互扶助の経済 無尽講・報徳の庶民思想史, みすず書房) .
- (2) 麻島昭一, 無尽業の存立基盤とその変容, 国連大学・人間と社会の開発プログラム研究報告, 1981, p1-30.
- (3) 朝日新聞 (第2山梨), それ行け!やまなし探偵団, 2016年9月16日, 26面.
- (4) 愛媛新聞, 今治「無尽」アンケート調査, 2016年5月5日, 6面.
- (5) 大木憲夫, 宮古島における模合集団—平良市松原の事例から—, 社会人類学年報, 弘文堂, 1978, p207-222.
- (6) 株式会社愛媛銀行, ひめぎん物語, 株式会社愛媛銀行, 2015.
- (7) 北島照明, 沖縄における模合の実態 (1), 商学集志 (日本大学商学研究会), 第41巻4号, 1972, p9-109.
- (8) 北島照明, 沖縄における模合の実態 (2), 商学集志 (日本大学商学研究会), 第43巻1号, 1973, p77-94.
- (9) 桜井徳太郎, 講集団成立過程の研究, 吉川弘文館, 1962.
- (10) 佐治靖, 「無尽講」の成立と展開—都市の民族研究をめぐって—, 福島県立博物館学術.
- (11) 調査報告書 第19集 町の歴史と民俗 (福島県立博物館), 1989, p137-158.
- (12) 榊原健一, 無尽講の経済的意味, 経済研究 (千葉大学) 29巻3号, 2014, p133-146.
- (13) 砺波和年, 寄り合いの経済学・ルポ頼母子の世界, 北国新聞, 16回連載 (1月3日—1月18日), 1990.
- (14) 松尾順介, ソーシャル・ビジネスと無尽・頼母子講, 桃山学院大学総合研究所紀要, 38巻1号, 2012, p 49-70.
- (15) 松崎かおり, 経済的講の再検討—『輪島塗り』漆器業者の頼母子講分析を通じて—, 日本民俗学, 日本民俗学会, 1993, p63-104.
- (16) 三浦圭一, 中世の頼母子講について, 史林, 第42巻6号, 1959, p1-22.
- (17) 守屋敬彦, 近代社会における頼母子講の意義について—京都府誌編纂資料として—, 文化史学, 28巻, 文化史学会, 1972, p28-48.